

「美しかれ、悲しかれ」

窪川稲子さんに

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）蘇よみがえらせられ

―：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）多分―何処どこかの

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）「#地から1字上げ」十月六日、鎌倉にて

1

「#地から1字上げ」十月六日、鎌倉にて

お手紙うれしく拝読いたしました。半年ぶりで軽井沢から鎌倉に戻ってきたばかりで、まだ何か気もちも落ちつかないままにお返事を遅らせておって申し訳ありません。

丁度軽井沢を立つてくる前に、いただいた御本の中の「樹々新緑」などをなつかしく拝読して参ったばかりのところへ、又お手紙でそ

の時分のことをいろいろと蘇よみがえらせられ、本当に何から先にとりあげて御返事を書いたらいいのかわからない位です。

あの頃のこと　　あなたがお手紙や「樹々新緑」の中でお書きになったその時分のこと　　を思いうかべると、いつも僕の口癖のようになつて浮んでくる一つの言葉があります。或る時はフランス語で、*Sois belle, Sois triste*　と、　又或る時は同じ言葉を

「美しかれ、悲しかれ」と。　ときには僕はその文句に「女のひとよ」という一語を自分勝手につけ加えて、口の中でささやいて見ることもある。そうすると僕の裡うちにいろんな事が浮んできたものでした。あなたがお書きになつていた、田端たばたや日暮里ひつりのあたりすずの煤すすけたような風景や、みんなの住んでいた灰色の小さな部屋々々や、毎夜のようにみんなと出かけていった悲しげな女達の一ぱいいいたバアや、それから、二三度そんな若い僕たちの仲間入りをして一しよに談笑せられていた芥川さんがすこし酔い加減になつてそういう女達を見まわしながらふいと思ひ出されたように僕の耳にささやかれたその *Sois belle, Sois triste*　という言葉だのが……

それはポオドレエルの一行でした。そのあとでお書きになつたものを見ると、そのときの芥川さんにはふいと思ひ出されたそのポオドレエルの美しい一行が、よほど深く胸におこたえになつたものが見えます。

「美しかれ、悲しかれ」　　ああ、本当にこの言葉くらい僕に自分の若い時分のことを、その苦痛も喜びも、一しよに思ひ出させるものはありません。フランス・ジャムのさまざまな少女を唄った詩集を読んでいたきりぐらいの年少の僕がいきなりみんなの仲間入りをさせられ、みんなの生き抜こうとしていたはげしい青春に面接さ

せられ、どれほど少年らしい戦慄と好奇心とをもってその新しい生を前にして足ぶみしていたことでしたらう。それはあなた達にさえお分りにならなかつたでしょう。そうしてあなた達がそういう僕にどんなに多くのものを与えて下さったか、それも殆どお気づきにはならなかつたに違いない。本当に、それに比べれば私があなた達に与えたものなんぞ物の数にもはいらぬことです。

いわば、そうやって、みんながはげしく生活し、いきいきとした仕事をしだしている傍らで、僕は自分の番がくるのを胸をしめつけられるような気もちで待っていたみたいでした、が漸と自分の番が来たかと思つたときには誰ももう居りませんでした。僕は一人きりで愛したり、苦しんだり、それから仕事をしたりしなければならなかつた……

そのうちもつと昔の友達が僕の傍に戻って来てくれたり、新しい仲間がぼつぽつと出来てきたりしました。そうして前よりももつとはげしく文学が語られ、精神上的の交易がなされ出しました。しかし、僕の裡に根づいている生命の樹は確かにあなた達が僕に植えつけてくれたもの。或いはそれをあなた達のおかげではじめてそれと気づいたもの、と言わなければなりません。そこに僕の詩の他とは異なる強みもあつたわけでした。

なんだか自分の事ばかり書いてしまいましたね。それにあなたに宛てたのやら、他のみんなに一しよに宛てたのやら、分らないものになりましたが、それというのも、あなたが　ことにあなたの小説だの、お手紙だのが、そのきっかけになつたもの故、御免下さい。

僕、結婚してもう一年半になりますが、始終旅先でばかり暮して

いるような気のしているせいか、なんだかまだ結婚したばかりのよ
うな気もちで、なかなか落ちつけませんでした。これからは大いに
落ちついて、この冬じゅうかかりそうな長い仕事に向わなければな
りません。僕は自分の新しい生活が　僕「#「僕」に傍点」とし
てよりも、僕達「#「僕達」に傍点」としての生活が、　自分の
今後の仕事の上どんな影を投げるものか、胸のおどるような期待
と、同時に一種の危惧きぐをもたずにはおられません。そんな新しい僕
の姿、あなたにはおかしいでしょう。こんどは僕のそういう生活ぶ
りだとか、これからしたいと思っっている仕事のことなどすこしお書
きしましょう。きょうはこれで失礼いたします。

2

「#地から1字上げ」十月十五日、鎌倉にて

こんどは多分一何処どこかの湖畔でああなたのお手紙を受取り、そこか
ら又お便りを差し上げることになるだろうとおもっております。

私は仕事のために小さい旅に出かけるばかりにしておりました。が、
急に身体からだの具合が悪くなり、医者いしやの忠告で少なくともその日数だけ
は静かに寝ていなければなりません。こうやって予定の仕事
を持ちながら、それがつい延び延びになってゆくのは、本当に気が
気ではありません。しかし、きのうあたりからやっと元気になって、
けさは日あたりのいいヴェランダでこの手紙に向えるようになりま
した。

朝のうちは此処ここにいると本当に気もちが好い。すぐ向うに古い松
の木のこんもりした低山こやまがあつて、それが一めに日をいっぱい浴

びながら、その何処かしらにいつも深い陰をひそませている具合、そのなんともいえない幽^{しず}けさがいくから見ていると倦^あきないのです。病中、室生^{むろむろ}さんから「つくしこひしの歌」をいただいたいて、気分がいいときに拾い読みした短篇中の心にしみたかずかずの情景が、此処にこうしていると、何か目前に彷彿^{ほうぶつ}として来てならないのも、それとこれとに一味通じあつた一種の翳^{かげ}りのようなもののあるためかともおもえるような、けさは静かな朝です。

「つくしこひしの歌」 私達にはもちろんのこと、それをお書きになられた室生さん御自身にも本当に思いがけなかつたにちがいないような、純粋な、いじらしいばかりの作品、それは同時にそんな小説をお書きになろうとは思ひもよられなかつたであろう「死のいざない」の最近のにがい御経験の中からでなければ、そんなにも甘美に、そんなにも無心に描かれはしなかつたろうと思われまして。そういう二つの極端のものをいつも御自身の裡にごく自然にお生かしになつていられるのには、それを見出す度にいつもの事ながら私は感嘆の念を禁じ得ません。

あなたの御近作、いまだ拝見しておりませぬのが甚^{はなは}だ心残りです。私はどうもこれまですべてに無精で、友人の作品でも、よほどそれを読みたいときに丁度手もとにあるような具合に行かないと、つい読まずにしまつて、あとで後悔することが多いのです。この頃は何かにつけて、もうすこし自分というものを突放して、他人というものに真面目に向わなければならぬと考えておりますが……

作者にとつては何よりもうれしい御言葉をあなたが与えて下さつた「かげろうの日記」も、私にとつては、先ず何よりも自分以外のものへの熱心な話しかけでありました。そうして私の話しかけた人

達のなかから、数人の相当の年輩の女の方だけが私の問いにまさしく答えてくれました。私はあなたをもその一人に数えることが出来るのだと知って、いま、その事でどんなによるこんでいるか、殆どお分りにならない位でしょう。　　そういう本当の読者がまだ少なくて、ほんの数人きりであったにせよ、それだけでも私の仕事の自分に対する意義はあったのだと思えるのです。

この私のはじめての他人への話しかけであった作品、及びこれからの私のしようとしている長い他人との対話「#「長い他人との対話」に傍点」であるべき新しい仕事から見れば、これまでの「美しい村」や「風立ちぬ」なんぞは、ほんの私のモノローグに過ぎぬでしょう。いつかまた、さまざまな見知らぬ他人との対話だとか、他人の悲劇への参加（けれどもそれ等の差し出がましい助言者にも、又ひやかな目撃者にもなりたくはない、ただその傍らにじっといて、それだけでもって不幸な人々への何かの力づけになっていくような者になっていたい……）だとかの後に、そういうもっと静かな、もっと力と諦めあきらに充ちたモノローグに帰って行くかも知れませんが。

「風立ちぬ」を書き上げたあとで、一年ばかり山のなかに孤独に暮してから、ようやく他人の方へ目を向けるようになり、なにかそれに話しかけたいような欲望を感じながら、「かげろうの日記」を書いた一方、それと殆ど同時に私は一人の女性と結婚いたしました。それも私にとっては自分のささやかな成長に役立たせたかったからにほかなりませんでした。

ジャック・シャルドン又と言うフランス仏蘭西の作家がその恋愛論を述べた小さい本のなかで、「恋愛というものに対する自分の考えはいる

いろに変化してきた。最初は、それは創造することなのだと考えた。それからそれは完全というものを好むことなのだと考えるようになった。が、最後にそれは反対に、一人の女性をあるがままに受け入れること、即ち何処から何処まで彼女自身であつて、いま若くあることも、又いつか年老いることも勝手であるところの、一人の自由な女性を受け入れることであると考えようになつて来た。「と書いてあるのを読みました。なんだかその言葉がそっくり今の私にあてはまるように思われますので、一寸此処ちよつとに書いてみる気になりました。同じ作家の「祝婚歌エヒタラム」という小説の翻訳がこんど出ましたが、結婚生活によつてはじめて人間が鍛えられてゆくという作者特有の思想の下もとに書かれた大へん立派な小説ですゆえ、いつかお読みになつて御覧になりませんか。

けさの新聞で、窪川君の御本が出来上つたことを知りました。昔からの友人の一人として、本当に心からおよろこびを申したく思います。どうぞよろしくお伝え下さい。

中野君からはこの夏のまえに一度お便りをいただきました。赤ちゃんがお弱いようで、蔭ながら心配しておりましたが、たいへん御丈夫にお育ちのようで本当によかつたと思います。数年前信州富士見で私が「風立ちぬ」に描いたような人生を生地で暮していた頃、同じように療養にいられていた妻君のところに見舞にいられた中野君と屢々しばしば会つて、一しよに近所の森の中を散歩したことなど、いまだになんともいえず懐かしい思い出になっています。ついぞそれきり会いませんが、この頃中野君たちも元気のように大へんよろこんでいます。こんど窪川君の御本の出たお祝いを兼ねて、室生さんをお誘いして、昔の仲間だけで集まるようなささやかな会をこの年の

暮にでもひとつししようではありませんか。西沢君や宮本君なんぞが
なんだかすぐ其処そこにいるようで、やっぱりいなくて淋しいですけ
れど。……

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学」6「新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

底本の「始め二重山括弧」と「終わり二重山括弧」は、ルビ記号
と重複するため、それぞれ「」と「」に置き換えました。

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。